

「日本から遠く離れて」 丹羽典生（国立民族学博物館准教授）

(1) 朝枝利男とは誰か 2018年10月6日刊行

朝枝利男の名前を、どれくらいの読者が存じ上げているのか心もとない。いま私は、彼の残した1930年代の太平洋諸社会の写真とたまさか出会い、作品と生涯に深甚なる関心を抱いている。彼の探検と紆余曲折に富んだ生涯についてつづりたい。

朝枝は、写真家、画家、博物館の学芸員として米国で活躍した人物である。ダーウィンの進化論で知られるガラパゴス諸島（南米エクアドル）には、30年代という時期に探検隊の一員として足を踏み入れている。

1893年12月9日に生を受け、家庭の事情から幼少時を群馬県の自然あふれる山々に囲まれて過ごした経験は、生涯にわたる旅への愛好と博物学への関心を育んだ。

東京高等師範学校（現筑波大）で学び、母校の麻布中学で短期間ながら教鞭を執った後に、アメリカ留学に飛び立つ。

関東大震災の影響で学業は断念したが、博物館関連の職に携わる中で剥製の知識を習得、また1929年にコダック社の写真コンテストで入賞するなど多彩な能力を披露している。

こうした経歴を買われ、30年代を通じて、太平洋地域への様々な探検隊に写真家として参加した。おかげでわれわれは、いまでは失われた太平洋地域の貴重な風景を目にすることができるわけだ。

(2) ガラパゴス探検 2018年10月13日刊行

朝枝利男がガラパゴス諸島（南米エクアドル）を訪問したのは、1932年のことである。米国カリフォルニア科学アカデミーのテンブルトン・クロッカー調査隊に、朝枝はカメラマンとして参加していた。

同アカデミーは、ガラパゴス諸島への探検隊を05年にはやくも派遣するなど草分け的な組織であった。朝枝が参加したのは、その2回目の調査隊であった。

博物学や地理学に、そもそも学問の情熱を抱いていた朝枝はガラパゴス諸島にも魅了されたようである。鳥類、爬虫類などをはじめとする動物から植物まで数多くの自然環境の写真を残している。

また日本から遠く離れ、外国人の調査隊に唯一の日本人として参加するという異邦人的境地にいたためであろうか、ガラパゴス諸島に集う風変りな外国人の姿も活写している。ドイツ人のヌーディストである。

生前に彼が残した太平洋に関する文章はあまり見つかっていないが、彼らとの出会いは、日本の雑誌に寄稿されている。なお彼が出会った風変りな外国人夫婦は、伊藤秀三・長崎大名誉教授の作成した年表を参照すると、朝枝と会った後に夫は死亡、妻はガラパゴスの地を去ったということである。まさに一期一会。他ではあり得ぬ数奇な出会いであったといえようか。

(3) スナップ写真 2018年10月20日刊行

朝枝利男は1930年代に、アメリカ人作家との周遊や米国カリフォルニア科学アカデミーによる探検隊に参加することで、太平洋をはばひろく旅している。その道行きは、ミクロネシアからポリネシア、メラネシアと、もちろん濃淡はあるものの太平洋全体をはばひろく覆うものであった。同じ地域の研究者の端くれとして、うらやましいことこの上ない。

民族学・人類学的な関心からみるとソロモン諸島の資料が質量ともに圧巻だ。儀礼、舞踏、入れ墨から装身具、さらには当時の村落の風景や家屋の様子、船の形態までいまでは失われた生活が撮影されている。

そうした調査目的から離れて、スナップ的に撮影された写真も今からみると興味深い。30年代のフィジーの離島におけるインド人の灯台守という、意外な場所で意外な仕事に就いた少数民族の姿が、彼の写真には残されているのだ。

そういえば、彼の写真のそこかしこには、日本を遠く離れて異国を棲家とする同胞の姿が残されている。日本から離れ、米国の調査隊の一員として太平洋に乗り出した写真家が、放浪先で出会ったのも非日本的日本人であったわけだ。出会いの喜び、祖国への哀愁、それとも境遇への共感。レンズ越しに彼らの姿を見ていた朝枝の胸には、どういった思いが去来していたのだろうか。

(4) 収容所体験と戦後 2018年10月27日刊行

朝枝利男の生涯における転換点として第二次世界大戦は外すことができない。1930年代の太平洋での周遊と探検に一区切りつけた後、日系人と結婚して、米国カリフォルニアに自らの写真スタジオを構えていたという。

ところが朝枝夫妻の生活は、41年に急変する。当時のアメリカにおける日系人がそうであったように、彼らも収容所へと送られた。

最初はカリフォルニア近郊のタンフォラン競馬場跡地に収容され、その後、砂漠に囲まれたユタ州のトパーズ収容所へと移送された。

それまで太平洋をまたにかけ日本人として単身探検隊に参加していた朝枝は、一転して日系人に囲まれた狭い収容所内での生活を余儀なくされることになったわけである。

そうしたなか、朝枝は自身の探検について自作の絵画とともに披露し、収容者に地理学を教授していたという。また彼は収容所内での生活を大量の水彩画として残している。そうした絵画を友人・知人などに寄贈していた。2017年スミソニアン博物館で企画された日系人に関する展示のチラシの両面は彼の水彩画で飾られている。

戦後、朝枝はカリフォルニア科学アカデミーにて学芸員として勤めた。68年に、サンフランシスコにてその生涯を閉じている。